
smoke of powder

至木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s m o k e o f p o w d e r

【Nコード】

N 0 0 5 1 V

【作者名】

至木

【あらすじ】

とある国で、殺し屋を営んでいる少女、アマネとミイナ。血と硝煙、暴力と殺人、善意と悪意——様々な思惑が入り乱れる街の中、彼女は葛藤を抱きながら仕事を引き受けていた。

ある日、気晴らしで路地裏で一人の少女を助けた。その出会いが、彼女達の運命を大きく変える物と知らずに。

encount

パン、と薄暗い裏路地の中で間抜けな音が響く。そして、数分遅れて、血と硝煙の匂いが辺りに浸食するように広がっていく。

私の目の前には、少し前までは人間の男だったものが壁に体を預けるようにして倒れていた。

その男の頭部は、自身の短い頭毛の殆どが紅色に染められている。おそらく、もう彼は動く事は無いだろう。そう結論付けると、自分の手に握られていたオートマ式の拳銃を、上着の裏側へと戻した。だが、私の仕事は、まだ終わりではない。その凄惨な場から背を向けて、裏路地の奥へと身を進める。

そこには、黒色の普通乗用車が停められていた。

その車の窓が開き、サングラスを掛けた女性が顔を出す。

「――終わった？」

無機質で、感情のない義務的な声。

それに私は、「ええ」と相槌を打ち、助手席のドアを開けて中へと乗り込む。

車は、急スピードで発進し、すぐに大通りに合流する。

もし、あの場面を見られていたとしても、この車を追うことは出来ないだろう。

運転席に座っているサングラスを掛けた女性は、ポケットに入っていた煙草を一本引き抜いて、私の方へ寄越す。

勿論、私に吸わせる訳では無い。私はポケットに入れていたライターを取り出し、タバコに火を着けて、彼女へと返す。

thanksと言って、彼女は自分の口に煙草を持っていく。

「やっぱり、仕事後の煙草はいいわねえ。五臓六腑に染み渡るわあ」

さっきとはうってかわって、幸せそうな声を出す。

染み渡ってるのは有害物質でしょう、と言いたくなったが、野暮

だと思ったので言わない事にする。

……その代わり、別の嫌味を言わせてもらう。

「あなた、今日は仕事という仕事はしてないでしょう」
「う」

彼女は、気まずそうに視線をそらした。

そう、今回の彼女は仕事という仕事はしていない。精精、車を運転した位だ。

それ以外の雑用含むありとあらゆる仕事は、私がしていた。

周辺の聞き込みをしていたのも私だ。ターゲットの通る道に当たりを付けたのは私だ。作戦（という程のものではないけれど）を立てたのも私だ。

そして、直接手を下しのも……私だった。

脳裏に、ターゲットの最後が浮かんだ。

意味の通ってない言葉で必死に叫びながら私に許しを請い、それでも銃を突きつけられた時の絶望の表情。そして、絶命。

「メンゴメンゴ。明日、チヨコパフェでも奢るからさー」

隣の女性は私の胸中を知らずに、無邪気に声をかける。

それに幾分か救われた気持ちになった。

「チヨコパフェ、超特盛りでお願いね」

「超特盛り？ 流石にそれはお財布的にキツイかなあ」

「ちなみに、私の懐には装弾されたままのベレッタM92が」

「よっしゃー、お姉さん、バンバン奢っちゃうよー。超奢っちゃうよー」

そんなくだらない会話を交わしながら、私達はアジトへと戻って行く。

私の名前はアマネ・T・アーノルド。

職業は、殺し屋。

act.1 『encount』

とある、オンボロアパートの一室。

『——それで、例の男はキッチンと始末したのかね?』

初老の男の声が、耳に当てた携帯電話から聞こえてくる。

それに対して事務的に、機械的に淡々と結果を報告していく。

「はい。脳天に銃弾を一発。あの場所に撃たれて生きている可能性は皆無に等しいかと」

『万が一という可能性は?』

「一応、少しの間はターゲットを監視していましたが動く気配は微塵も有りませんでした。即死したと見て間違いないでしょう」

『誰かに見られたという可能性は?』

「監視カメラの類は設置されていません。そして、殺害当日は誰にも見られていないことを確認しつつ、車まで戻り、その後は一般車両に紛れました」

携帯電話の奥で、唸るような声が聞こえる。

『それでも、万が一ということもあるだろう。本当に大丈夫なのか?』

「……」

『ああ、気を悪くしないでくれたまえ。君達を信頼していない訳で

は無いんだ。ただ、君達の場合は――」

「私が若い女性だから、ですか」

う、と相手が言葉に詰まる。

私の外見年齢は、15歳程度の少女にしか見えないのだ。（もつとも、自分の正しい年齢は私にも分からないが）

それならば、少しは不安になるというものだろう。

「失礼ですが、貴方は今まで何人殺したことがありますか？」

少しばかり語気を強めて、電話の向こうの人間に訪ねてみる。

「……」

思ったとおり初老の男が、押し黙った。

おそらく、この人間は自分で人を手に掛けたことがないのだろう。それはきつと、幸せなことなのだろう。

「私は今まで、何十人も殺してきました。おそらく、貴方よりも多く殺しているでしょう」

だから、お前が横から口を挟めるような事じゃないんだよ。言外にそう言い聞かせるつもりで私は語った。

ゴクリ、と電話の向こうから息を飲む音が聞こえてくる。

互いに、言葉を出すのが躊躇われるような、一触即発の空気が電話越しに漂い始める。

しばしの間、沈黙。

聞こえてくるのは、互いの息遣い。

「……そうか。任務ご苦労。後始末は私達に任せておけ」

意外にも、沈黙を破ったのは相手側からだった。

「ありがとうございます。それでは、報酬は何時もの口座に振り込んでおいてください」

「了解した」

ピ、と携帯電話の電源を切り、私は腰掛けていたベッドに倒れ込む。

「お疲れさん、アマネ」

さつきから、大きめのソファーに寝っ転がっていたミイナが起き

上がって、私に労いの言葉を掛ける。

「また仕事をしないのね、あなたは」

「気にしない、気にしない」

「……今回の報酬の取り分は、9：1と言ったところかしら」

「ちょ、おま」

抗議をしようとするミイナに、「冗談よ」と一言で制する。

それを聞いたミイナは、安心したように息をついて、再び横になる。

そんな様子を横目で見ながら、本当にこの人は、私よりも年上の女性なのだろうかと思う。

ミイナ・エリザベス。

確かに見た目は、20代前半で、女である私の目から見ても思わず目を留めてしまうほどの美貌を持った人だ。

基本は怠け者の、欠点ばかりに目が行く模範的なダメな大人の女性。

その中身は外見とは正反対に子供よりも子供らしい。だが、きちんと締めるところでは締めて、空気を読める部分もある。

本当に、彼女は色々と不思議な存在だった。

殺し屋という観点で見たら、ある一点において彼女は突出した才能を持っていた。

それは、命を奪うことに何の躊躇いも持っていない点だ。

相手が子供だろうが女性だろうが、彼女にとっては何の意味もない。殺す対象ならば、一切の慈悲は無く、彼女は人を殺すだろう。

——きっと、私ですらも。

おそらく、私が一番欲しい物を、彼女は持っているのだろう。

もしも、彼女のように全てを割り切れるのなら。

何も悩まずに人を殺すことができるのなら、それはとても幸せなことなのだろう。

「アマネ、大丈夫？」

ソファアの背もたれからミイナは心配そうに顔を出して尋ねてく

る。

その言葉で、私は我に返った。

「ちよつと考え事をしていただけよ。何も問題はないわ」

「ふうん……」

訝しむように、彼女は目を細める。

こちらとしては、あまり追求されたくない話題なのでとつと切り上げる。

「ほら、明日も早いんだからとつと寝るわよ」

まだ何か言いたそうなミイナを尻目に、手元にある照明の電源リモコンのスイッチを切る。

渋々と言った様子で、ミイナは毛布を被り、ソファアの上で横になる。暫くすると、彼女の寝息が聞こえてきた。

私も、毛布を被り、漆黒の中へと意識を溶かした。

翌朝。

車が無作為に行き交う騒がしい街の中で、私はただ目的もなくぶらりぶらりと歩いていた。

ポツポツと店が開き始め、少しずつではあるが街の中に喧騒が満ち始めている。

と言つても、まだ閉じている店も多く、昼間のそれに比べると些か落ち着いた感じでは有った。

ミイナは本当の本当に珍しいことに、仕事の交渉に出掛けていた。そんな事になった理由を明かすには、早朝に遡らなければならぬ。

『昨日、私は結構サボったからね。だから、今日はその埋め合わせって事で』

彼女が私にそう言った時、熱でも有るのではないかと半分以上は本気で心配してしまった。普段の彼女の態度から考えると、色々アレなのだ。

ミイナが自分から交渉する事は殆ど無い。(もつとも、しないだけであつて能力は十二分に有るのだが。そこが彼女のアレな所だ) 取り敢えず、別にそこまで気にする必要は無いのと言いつ返す。
『いやあ、最近のアマネは何か思い悩んでいるようだからさ。ちょっと息抜きが必要だと思ふんだよねー』

——思わず、押し黙ってしまった。

まさか、ミネにそんな事まで勘付かれているとは思わなかった。
『だから、私が交渉している間は自由行動って事で。あ、仕事は本気でやるから心配しないで』

結局、私は彼女の提案を飲み、気分転換を兼ねて街を歩くことに決めた。

「……9時、50分」

まだ、本格的に街が活気に溢れるまでには2、3時間程度は掛かる。

ミネとの待ち合わせの時刻の指定は特にしていない。

今日は交渉以外には特に用事が無かったはずなので、両者の気が済んだら連絡するという事になっている。

だから、今日だけは何をしても特に問題は無いのだけれど……

「いざ、何でもしても良いということになると何も思い浮かばないものね」

口から言葉が零れ出る。

そう、本当に何もすることが思い付かないのだ。

血と硝煙の匂いの中でずっと生きていた私にとっては、仕事をすること位しか脳がない典型的なワークホリックなのかもしれない。

何時もなら隣にミイナが居るので、勝手に向こうが自分一人でくだらない話で盛り上がり、それを呆れつつ私は相槌を返すのだが、

生憎そのミイナも今日は居ない。

はあ、と大きく私は溜息を付く。

どうやら私は、本当に人を殺す事以外は何も出来ない人間らしい。しかも、その人を殺すという行為ですら最近鈍ってきている。いや、鈍っているというよりも——悩んでいる、という方が正しいのだろうか。

昔は、人を殺すことに何の躊躇も無かった。そうしなければ、生きて行くことなどできなかった。

私の両親の顔は、全く覚えていない。名前も覚えていない。

知っているのは、彼らが日本人であったこと。そして、何かの事故に巻き込まれて殺された事だけだった。

田中「天音。それが、私の本来の名前だったらしい。

それから、その不運な事故で独り身になって色々な施設を巡っている私を拾ってくれたのは殺し屋さんだった。

彼女は、私に生き延びるための知恵を教えてくれた。つまりは、人を殺す技術を。

……別に、彼女を恨んでいるわけではない。むしろ感謝している。だから、私は拾ってくれた殺し屋さんの苗字を付けてアマネ・T・アーノルドと名乗っている。言うまでもないが、TはT a n a k aからだ。

ただ、私は自分が薄汚れている存在に思えて仕方がないだけだった。

人を殺す仕事をしている癖に、人を殺すことに躊躇する。矛盾した人間。

——そんな憂鬱な事ばかり考えて歩いていたらどうか。いつの間にか、ゴロツキの溜まり場である裏路地の近くへと着ていた。

聞こえてくるのは、街とは違う負の喧騒。怒鳴り声が、響いてくる。

こんな所では、気分転換にすらなりやしない。

そう思つて、踵を返そうとしたその時。

「誰か、誰か助けてくださいっ！」

路地の曲がり角の、丁度私からは見えない位置から、女性の悲鳴が反響して来た。声の質からして、私と殆ど変わらない歳だろう。

そして、やや遅れた後に男性の怒鳴り声が聞こえてくる。内容は上手く聞き取れなかったが、どうせ碌なものでは無いだろう。

さて、いつもなら特に意に介せず立ち去るところなのだが――逡巡し、私は路地の奥へと急ぎ足で進んで行つた。

気分が沈んでいたところだ。ストレス解消と気分転換には良いところだろう。

曲がり角を抜ける。その先には、案の定、腰を地面に付けて怯えて私の方に背を向けている少女が居た。彼女の近くには、大きなアタッシュケースが落ちていた。

そして、サングラスを掛けて小汚い服を着ている微妙に体付きのいい男性が右手に持ったその少女をバタフライナイフで脅しているいかにもなシチュエーション。

男は私が現れたのを見て一瞬だけ表情を強ばらせたが、相手が年端も行かない少女だと分かったと、「ヘッ」と余裕げに鼻を鳴らした。少女は、私が現れたことにすら気づいていない。

「……何だ何だ？　ここは何時からオンナの子達の遊び場になったつてんだあ？」

馬鹿にしたように、男が私に指を差して嘲笑する。

その男の様子を見て、少女は振り返る。そして、私が居ることに気づくと、狼狽えたような表情を見せる。

おそらく、まだ情報が上手く整理出来ていないのだろう。私が敵か味方か、はたまた無関係な人間か。その辺りのことで戸惑っているに違いない。

この状態なら余計なことはいらないだろう。事が終わるまでの間は放っておいても良さそうだ。

取り敢えず、男の方を片付けさせて貰うとしよう。

「その子から離れなさい。さもないと、容赦しないわ」

一応、言葉だけでも警告をしておくとする。

もつとも、応じることはまず無いと思うが、形だけでも行っておくだけで罪悪感はある程度は和らぐ。

男は、明らかに年下の女の子に命令されたことが気に触ったのか、あからさまな不快感を示した。

「はああ？ 誰に向かって口聞いてんのか分かってんのか？」

案の定。

テンプレートのような答えを返した男を見て、心のなかで私は呟いた。

「もう一度警告するわ。その子から離れなさい」

「オイオイ、薬でもヤツてんのかクソガキ。」

「知らないわ。それより、その子から離れなさい。これは最終警告よ」

まだ地べたを這い蹲ってる少女の前、つまりは男と対峙する場所に移動した。

別に彼女を庇うわけではない。この位置でないと、後で色々と不都合になるからだ。

「そーかいそーかい。どうやら痛い目に合わなければ分らないってわけだ」

男は自分の持っていたバタフライナイフを右手の中で弄ぶ。自分は凶器を持っているぞ、というあからさまな威嚇。

普通の人間なら、きっとそこで物怖じしてしまい、戦うこと無く白旗を上げるのだろう。

だが、私は違った。

私の上着の下には武器を隠していることもあるが、そうではない。彼の様子から分かったことがあるからだ。

おそらく、この男はあまり場数を踏んでいない。有るとしても、無抵抗の人間にしか暴力は振るったことが無いだろう。

もしも、本気で抵抗する相手と対峙したことがあるのなら、今の

ように武器をわざわざ弄ぶ余裕が有るわけがない。

本気で抵抗する人間は、時に信じられない力を発揮する。だから、殺れる時に殺らねばならない。

それを理解していないということは……コイツは、十中八九ただのチンピラなのだろう。

「に、逃げてっ！」

……さっき、助けてと大声で叫んでいたのはどこの誰だったのか。後ろから悲痛な声が聞こえてくる。

年代の女の子には、危なすぎると相手だとも考えているのか。案外、心優しい女の子なのかもしれない。

だとしても、逃げるつもりは全く無いのだが。

「動くんじゃねえぞ、クソガキ。今から、土下座してオレの靴でも舐めるってんなら考えてやんねえこともねえぞ？」

「……一応、聞いておくけど」

「ああん？」

「離れるつもり、無いのね？」

「当たり前だろうが、それよりもオマエが——」

その言質を確かに取った瞬間。

私は一歩前に出て、左足を軸にして捻りを入れ、右足で思いっきり男の右足と左足の間を思いっきり蹴り上げた。

つまりは男性にとっての人体急所の一つである、股間を。思いっきり。全力で。

「——あがつ！」

奇妙な声を上げ、ナイフを落とす。その開いた両手で、男は股間を押さえながらその場に平伏した。

衝撃の大きさからか、眼を開けて口から涎を垂らしながら気絶していた。他愛も無い。

気分転換にも、なりやしない。

せめて、一撃は耐えきって反撃でもしてくれれば良いのに、と独りごちて、私は気付く。

結局、私は正當的に暴力を振るえる相手を探していただけに過ぎないのだ。

誰の為に？ 勿論、自分の憂さ晴らしをするためだけに、だ。いつもなら、相手の行為が正しかろうが悪かろうが問答無用で殺しているのに、だ。

……本当に、自分が馬鹿みたいだ。

はあ、と大きくため息を付いて少女の方へと振り返る。

「そこのお嬢さん」

「ひゃ、ひゃいつ！」

少女は呂律の廻っていない声で、だけど大きな返事をする。まだ、完全に状況を把握していないらしい。

この隙に、忠告だけさせて貰ってとっとと帰らせてもらおう。

「この辺りの路地は治安が悪いから、余り近寄らないほうがいいわよ」

「え？」

「次からは、今のように運良く助けてもらえるとは思わないこと。さもないと、酷い目に合うわ」

「え、えつと」

「それじゃ、さよなら。二度と合わないことを願ってるわ。 have a nice day」

一方的にまくし立てて、未だに呆然としている彼女を横切る。後ろから彼女の声が響いてくる。

「ちよ、ちよつと待ってください。まだ、お礼も何も——」

「別に、そんなモノが欲しくて助けた訳じゃ無いから」

振り向かずに、なるべく冷淡に言い返す。後ろで、彼女が何か私に呼びかける声が聞こえたが、無視する。

実際、礼が欲しくて助けた訳ではない。ただ、気分転換を求めていただけだった。

気分は晴れるどころが更に悪化したわけだが……まあ、仕方が無いのだろう。

そんな、何処か虚しい気持ちで歩いていからだろうか。いつもなら背後の気配に気を付けていたのに、今は完全に忘れてしまっていた。

途轍なく無防備な私の背中を、後ろから思いっきり引つ張られる。

「——ッ」

ここで下手に抗ったら、無様に背中から倒れ込んでしまうかもしれない。ならば、その引つ張られる力に抗わず、むしろ受け入れるようにして、数歩下がる。

それによって、引つ張られる力の勢いを完全に殺す。そして、上着を掴んでいる片方の手を右手で掴み、いつものように間接を潰す勢いで捻ろうとして——直前で思いとどまる。

この状況で、背中を掴める人間は一人しか居ないだろう。掴んでいる相手の両手を、右手で軽く払い落とし、再度振り返る。

そこには、さっきまで倒れていた少女が起き上がってこっちを見ていた。

「……何のつもりかしら？」

「えと、そのお礼を」

「貴方の国でのお礼って言うのは、恩人の背中を引つ張ることなのかしら」

「ち、違いますっ！　今のは、その、貴方を呼び止めようとして——」

「普通に呼び止めれば良いじゃない」

「さっきからしてました！」

「ああ、そういうばそうだったわね。だったら、それでも帰ろうとしているのはどうしてなのか、よく考えなさい」

そうして、彼女の制止を振り切って強引に帰ろうとする。

ここまで言えば、要領の悪そうな彼女でも分かるだろう。私は一人になりたい。礼なんか、必要としない。

だが、彼女は私の斜め上を行った。

「あの、どうしてです？」

「はい？」

彼女の素っ頓狂な返答に、思わず間抜けな声を出してその場に止まってしまう。

「よく考えたけど、分からないんです。どうして帰ろうとしているんですか？」

「……」

私は閉口した。

察しなさいよ、と思ったが気持ちを押さえる。クールに、クールに。

「あのね、お嬢さん。何度も言ってるけれど、私はお礼が欲しいわけじゃないの」

「はい。でも、私はお礼をしなければ気がすみません」

「あなたの気がすまないだけ、でしょう。私は一人になりたいのよ」此処まではつきりと言えば、幾ら何でも諦めてくれるだろう。

だが、そんな私の思いと裏腹に依然として少女は首を傾げて、私に疑問の眼を向けてくる。

「どうして、一人になりたいんです？」

「それは、まあ……どうでも良いでしょう」

あまり深入りさせたくない話題なので、そこは強引に打ち切らせてもらう。

まさか、正當的に暴力を振るえる相手を求めている自分に嫌気が差した、と正直に言うわけにもいかない。

「そもそも、どうしてそんなにお礼をしたいのよ。相手が良いって言ってるのだから構いやしないじゃない」

話題を逸らしつつ、どうして少女がこんなにお礼をすることにこだわっているのかを尋ねる。

相手が要らないと言っているのだから、得をした程度で考えれば良いだろうに。

「だって、嫌なんです。私は、自分の恩人に何もできない人になりたくないんです」

凜として。彼女は顔を上げて、私の眼をはつきりと見据えながら質問に答える。

彼女の曇りのない眼を見て、ああそうか、と心のどこかで納得する。

きつと、彼女は何の迷いもなく、自分の思ったことが出来るんだろう。自分が決めたことに何の躊躇も持たない人間なんだろう。礼を返したいと思えば、きつと礼を返すまで納得しないような――頑固で、それでいて真っ直ぐな人間なんだろう。

薄汚れた私から見た彼女は、とても眩しく見えた。

「……勝手にしなさいな」

結局、私は渋々と了承した。

ぱあ、と彼女は顔を輝かせる。礼をする、たったそれだけの事がそんなに嬉しいことなのだろうか。

私には、分からない。

「分かりました！ それじゃあ、全力でお礼をさせてもらいますので、覚悟してくださいね！」

どうやら、彼女のお礼には受けるほうに覚悟が必要らしい。どんなお礼だ。

「背中を引っ張らなければ、別にいいわよ」

「……その、ごめんなさい」

さっきまでの喜色満面から打って変わって、申し訳なさそうに俯く。

小動物みたいな子だな、と何となく思った。きつと、保護欲を駆り立てられるような子なのだろう。

「気にしてないわ。そんな事より、私はまだ、貴方の名前を聞いていないんだけど」

「あ、そう言えば自己紹介するのを忘れてました。私はクリス・イーガーと申します」

「私はアマネ。アマネ・Ｔ・アーノルドよ」

そうして、彼女――クリスは、小さくお辞儀をして、私の隣に並

んだ。

「……どうでもいいけど、アタツシケース忘れてるわよ」
「あつ」

クリスは落ちているアタツシケースを拾い、てへへと恥ずかしそうに笑った。天然ドジっ娘、という言葉が頭をよぎる。

私と同じくらいの年齢の少女。本当なら、私もこの娘のように笑えるような人間に育っていたのかもしれない。

そんな、酷くどうでもいい哀愁を感じながら、私は歩き始めた。慌てて、クリスは置いて行かれないようにと小走りで私に追いかけてくる。

……今にして思えば。

この出会いが、彼女の人生を大きく変えてしまったのだと思う。それが良い事だったのか、悪い事だったのか。

私には、分からない。

encount (後書き)

初投稿です。

色々とお見苦しいところがあるかもしれませんが、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0051v/>

smoke of powder

2011年7月19日03時18分発行